

温泉ドラゴン王国 1  
～この国もドラゴン1度はおいで～

山川進



OVERLAP



## プロローグ

「なんてこった……」  
 極東の小国「ユ国」の王子である僕——ユ・アリマは、露天風呂で絶望に打ちひしがれていた。

浴室の壁を見れば、ここが王室御用達の浴場であることを示す、三本の稲妻をあしらったユ家の家紋が飾られている。

外を眺めれば、すり鉢状に広がる山間の森と、天に向かってそびえ立つ名峰又ブル山が一望できる。露天風呂から眺める万年雪の霊峰は、まさに絶景だ。

大陸全土を統治していた「古代魔法国家」が滅亡して四〇〇〇年余り。世界から魔法技術は失われ、大陸は百の国が覇権を争う群雄割拠の時代を迎えていた。

そんな戦乱の大陸にあって、風光明媚な景色を望める大浴場はユ国にしか存在しない。露天風呂はユ国王子である僕の自慢であり、心からくつろげる憩いの場でもあった。

そんな憩いの場で、僕は湯に浸かりながら、書類の束を持って絶望に打ちひしがれている。

「金がないのは知ってたけど、まさかこれほどとは……」

湿気てしわしわになっている書類はユ国の内部資料であり、ここ三年にわたる国家予算の収支が記されたものだ。

ユ国は赤字だった。それはもう見事な赤字だった。目にも留まらぬ速さで突っ走る火の車だった。このままでは数年のうちに国が破産するであろう重大な危機だった。

「こんな状態になるまで陛下は何をされていたんだ」

あまりの惨状に書類を正視できないまま、僕は、いつものほほんと笑っている父の——  
国王陛下の顔を思い出す。

僕が十六歳の誕生日を迎えたとき、父は「そろそろ国政に関わってみるか」と言ってくれた。やる気に燃えた僕は意気込んで国の内部資料をかき集め……。結果、絶望に打ちひしがれている現在である。

早く手を打たなければ、三百年の歴史を誇るユ国が僕の代を待たずに滅亡してしまう。それだけは何としても阻止しなければ。

僕は湯船に肩まで浸かりながら考える。どうすれば傾いた財政を立て直せるのか。

だが、のぼせるほど湯に浸かっても何一つアイデアが閃かない。そりゃそうだ。簡単にアイデアが閃くなら、火の車になる前に誰かが手を打っている。それほどまでにユ国は金儲けに向いていない国なのだ。

——むにゅ。

唐突に、僕の背中に弾力のある柔らかい何かが押しつけられた。

「何を一人で難しい顔をしているのだ？」

聞こえてきたのはハスキーで艶のある女性の声。背後から抱きつくような格好で、細い腕が僕の首筋に絡みつく。マニッシュな言葉遣い、不遜な態度、そして背中に押しつけられた温かくて柔らかな二つのふくらみ……。

むにゅ、と柔らかな圧迫が加えられ、僕は蛸のように顔を真っ赤にしながら叫ぶ。

「ユフィ！ 僕が入浴しているときは入ってくるなど何度言えば」

「良いではないか。姉弟水入らずで仲良くして何が悪い」

「姉弟でも男と女なんだから問題あるだろ！」

「ほほう。アリマは姉に欲情しているのか？ 浴場だけに」

くだらないダジャレを交えながら、ユ国王女であり僕の実姉であるユフィは、豊満な双丘をぐいぐいむにゅと押しつけてくる。密着されたうえに「ふっ」と耳に吐息を吹きかけられた僕は、たまらず姉を振り払い、ばしゃばしゃと水を掻き分け逃げ出した。

ユ・インⅡユフィは僕の四歳年上の姉であり、ユ国が誇る天才剣士だ。

長身ですらりとした肢体。腰まで届く艶やかな長髪。目鼻立ちの整った凛とした面立ちで、明るく人懐っこい性格は老若男女を問わず誰からも好かれる、ユ国のアイドル的存在。

それほどの美貌でありながら、剣の腕前は国内では敵無し。大陸最強の兵団を有する武力国家「帝国」で行われた皇帝主催の御前試合でも、並み居る強豪を下して準優勝を果たすという快拳を成し遂げた剣の申し子。

そんなルックスも、性格も、剣の腕前も完璧な彼女に、重度のブラコンという致命的欠陥があることを国民の大半は知らない。

「逃げることはないだろう。姉は傷ついたぞ」

「勝手に湯船に入ってくるユフィが悪いんだろ！ 何しに来たんだよ！」

「何しに来たとはご挨拶だな。私はアリマが難しい顔をしていたから、体で慰めてやろうとしただけだ」

「言葉で慰めてくれればいいよ！ 体はいらないよ！」

「いけずだな。それでは私が楽しくないではないか」

「僕はユフィを楽しませるために悩んでるわけじゃない！」

ユフィに背中を向けながら怒鳴る僕。いまち迫力に欠けるけど、裸の姉を凝視するわけにはいかなないので仕方がない。

「で、さっきから何を悩んでいるの？ 性の悩みなら姉が全身で受け止めて……むむっ」  
ユフィは僕がさっきまで読んでいた書類を見つけたようだ。ばらばらと紙をめくる音が背後から聞こえてきた。

「なるほど。アリマはユ国の貧しさに心を痛めているのだな」

「……そうだよ」

隠しても仕方がない。僕は背を向けたまま素直にうなずく。

「このままでとユ国は遠からず破綻する。国を存続させるには思い切った処置が必要だ。だけど、何をすればいいか思いつかなくて……」

口では何だかんだ言いながら、根っここのところで僕はユフィを信頼していた。ブラコン以外は非の打ち所がない自慢の姉に、僕はつい甘い、頼ってしまうのだ。

「そういうことならば私に任せておけ。ようは大金が転がり込めばいいのだろう？」

どうやらユフィには秘策があるらしい。驚いた僕は思わず振り返り、全裸の姉を目にして大慌てで視線を逸らした。

「ど、どうする気？」

顔を真っ赤にしながら尋ねる僕へ、ユフィは露天風呂から見える景色を——ユ国が誇る名峰ヌブル山を指差す。

「ヌブル山へ行く」

ヌブル山は、多くの火山を抱えるユ国の中でも特に有名な活火山だ。美しい景観とは裏腹に、切り立った崖や毒性の強い火山ガスなど、自然の脅威が人間を寄せ付けない。そこは秘境であり、そして……。

「危険だよ！ スブル山といえばドラゴンの巣がある場所じゃないか！」  
 「それが狙いだ！ 私はスブル山のドラゴンを生け捕りにする。生きたドラゴンを捕獲して見世物にすれば、世界中から見物客が集まってくるぞ！」

人の集まる所には金も集まる。ユ国を訪れた観光客の落としていくお金によって町が潤うという発想自体は理にかなっているけれど……。

「無茶だ！ いくらユファイが剣の達人でも、ドラゴンを生け捕りなんて無理に決まっている！」

「安心しろ。私は強い。それに、アリマを残して死んだりしない」

いつの間近に近づいていたのか、ユファイの手が僕の肩を掴む。視線を上げると、間近にユファイの整った顔があった。ユファイの澄んだ瞳がゆっくりと近づいてくる。

「だが、正直に言うのと少し怖い。だから私に勇気をくれなにか？ 旅立つ前に、私と美しい思い出を……むちゅー」

「さっさと行け！」

ユファイが唇をタコのようにすばめたので、僕は彼女の顔面を鷲掴みにして押し返した。

「やーん」と楽しげな声を上げながら、ユファイは背中から湯船に倒れ込み、盛大に水しぶきを上げた。

破廉恥な姉と浴場でじゃれあいながら、僕は考える。

ドラゴンはともかく、ユ国を観光地にするというのは悪くないアイデアだ。

問題は、どうやって観光客を集めるか。みんなが「この場所へ行きたい」と思うような魅力ある観光スポットをどう作ればいいのか。

僕はマグマの熱で温められた地下水を利用した、広々とした開放感のある天然露天風呂に入り、緑豊かで風光明媚な景色を満喫しながら考える。

観光客が来なくなるような魅力的な何かが、果たしてこの国にあるだろうか？ そんなものがあるのなら、誰でもいい、僕に教えて欲しい。

「では、ドラゴン退治に行ってくる」

純白の甲冑かちゅうに身を包んだ女剣士が、馬上から爽やかにウインクする。

露天風呂での決意表明から一夜明け、日の出とともに叩き起こされた僕は、意気揚々と馬にまたがる姉を呆れ顔で眺めていた。まだ朝靄あさもやの残る王宮では、可哀想かわいそうに、ユフィの旅程に付き合わされる兵士三名が黙々と馬に荷を積んでいる。

「本気でドラゴンを捕まえるつもりなの？ てっきり冗談だと思ってたよ」

「本気に決まっているだろう。アリマが喜ぶことなら私はどんなことでもするぞ」  
重度のプラコン発言も、ここまで堂々とされるといつぞ清々すがすがしい。

確かにユフィは強い。剣士としてなら王国の歴史上最強と言っても過言ではない。もしも王国でドラゴンを倒せる人間がいるとしたら、それはユフィを置いて他にいないだろう。しかもユフィは一度言い出したら絶対に引かない性格だ。それは血を分けた弟である僕が一番良くわかっている。

……それに、悔しいけど自信に満ちあふれたユフィはすごく格好いいんだよね。「これが僕の姉さんだ！」と大声で自慢したくなるほどに。  
だから僕にはユフィを止められなかった。呆れ顔でため息をつくしかなかった。

「わかったよ。僕はユフィを応援する。だから絶対に生きて帰って来てよ。死んだりしたら許さないからね」

真顔で忠告すると、ユフィはわなわなと唇を震わせ、馬から飛び降りて熊を絞め殺す勢いで僕の頭を抱きしめた。

「なんて可愛い弟なんだ！ 大好きだぞ、アリマ！」

「いいから離せよ！ 甲冑が痛いんだよ！」

金属製の胸当てにこりこりと頭を押しつけられた僕は、力づくでユフィの手をふりほどく。

「もういいから、さっさとドラゴン捕まえに行けよ」

「ふふふ、照れるなんて可愛いな」

「さっさと行け！」

こうして僕は、全身からラブラブオーラを放ちつつ、投げキッスしながら出発するユフィを王宮の外まで見送った。

門の外で姉が見えなくなるまで手を振りながら、僕は半年前にも同じように家族の旅立ちを見届けたことを思い出す。半年前に王国を飛び出したすっかり者の妹は、遠い異国の

地で元気にしているだろうか。

僕には四つ年上の姉と、四つ年下の妹がいる。姉のユフィが武勇に優れた女傑なら、妹のコハネは勉学に秀でた才媛だ。勉強の虫であるコハネは学問の盛んな隣国に留学していた。

姉と妹。出立した二人の無事を祈りながら、僕は王宮へ引き返そうとして……そこで、こちらを覗き見ている第三者の存在に気がついた。

背丈は僕より頭一つ小さい。小柄な人影は登山用の大荷物を背負い、汚れたフードを目深にかぶって顔を隠していた。年齢も性別もわからない怪しい人物が、木の陰からこちらを覗き見ている。

「王宮に御用ですか？」

僕が声をかけると、怪しい人影はあたふたした様子で周囲を見回してから、恐る恐る自分を指差した。そうですよ、あなたに聞いてますよ、他に人はいないでしょ。

「あ、あの……すみません……」

気弱そうに囁きながら、怪人物はフードを取って素顔をさらす。怪人物の正体は、ぼさぼさの髪、泥で汚れた顔、度の強い丸メガネが特徴的な、僕と同じ年ぐらいの女の子だった。

「君はユ国の人間じゃないようだけど」



「は、はい！ 私、ハナリマキといえます」  
 名乗ると同時に勢いよく頭を下げる少女。その拍子に背負っていた荷袋の口が開き、中身が地面にぶちまけられた。「はうあつ！」と叫びながら、少女はあわてて荷物をかき集める。

「それで、王宮に何か御用ですか？」

「はっ！ そうでした！」

ハナと名乗った少女は荷物を抱えて立ち上がり、姿勢正しく背筋を伸ばす。

「えっと、私は、帝国軍聖遺物研究所所属の研究員で、あの、だから……国王陛下に会わせてくださいっ！」

そう叫ぶと、彼女は勢いよく頭を下げ、背負っていた荷物を残らず地面にぶちまけた。

ユ国は、大陸の東端に位置する小国だ。

東には広大な海が広がり、北の国境は宗教国家「教国」、南と西の国境は軍事国家「帝国」の領土と接している。地図で見ると「二大国の隙間にぽつんと残された小国」といった趣だ。

そんなユ国の唯一にして最大の自慢は、建国以来一度も戦争の被害を受けていないこと。戦争に参加したことも、戦火に巻き込まれたこともない。平和こそがユ国の自慢だった。

ユ国の北にある「教国」は、天地万物に神は宿るといふ自然崇拜の教えのもと、急速に勢力圏を広げている新興国だ。信仰という強い絆で結束した軍隊は、「聖戦」の名で他国への侵攻を繰り返している。

さらにユ国の西には、大陸最強の軍事力を誇る「帝国」が控えている。帝国は、大陸最大の版図を誇る巨大国家「連邦」と、大陸の覇権を賭けて長年争い続けていた。

これほどに強くて好戦的な国々と隣接しながら、ユ国は三百年の長きにわたってのらりくらりと侵略をかわし続けていた。

まあ、有り体に言ってしまうえば「他国から相手にされていない」ってことなだけで。火山国であるユ国は国土のほとんどが山地であり、交通の便が非常に悪い。土地が痩せていて作物は育ちにくく、地震や洪水や火山噴火やドラゴン襲来といった自然災害も多い。そんなわけで、国境を接する大国からは「占領する価値がない」とみなされて放置されているのがユ国の現状だ。

ユ国三百年の安寧は、諸国の無関心によって成り立っていた。

だから、帝国軍の肩書きを持つ人間が押しかけて来て国王陛下との謁見を要求するなど、前代未聞の出来事だった。陛下との取り次ぎを頼まれた僕が慌てるのも当然だ。

そんな非常時に当の国王陛下は何をしていたかと言うと……。



「おーい、陛下〜」

「あんれまあ、アリマでねえか。どしたべさ？」

鍬で畑を耕していた野良着の大男が、僕の呼びかけに振り返る。

ここは町外れにある芋畑。ここで農民たちに紛れて土いじりに精を出している浅黒い顔の中年男こそ、誰であろう現国王のドーゴ三世だ。

「アリマが畑さ来るなんて珍しいんでねか？ オラと一緒に芋を作る気になったべか？」

「ならないよ」

首に巻いた手ぬぐいで汗を拭く国王に、僕は呆れ顔で言い返す。

僕の実父である国王ドーゴ三世陛下は、農作業が大好きだった。国策として農業を励行するだけでは飽きたららず、暇さえあれば野良着に着替えて農民と畑仕事に勤しんでいる。おかげで農民たちの田舎訛りが板に付いてしまい、威厳を損なっていること甚だしい。

僕に言わせれば「農業中心の国作りなんてやってるからユ国は貧乏なんだ」となるのだが、反面、庶民と肩を並べて農作業に励む王様は民から絶大な支持を得ていた。貧しいながらも国が安定しているのは、国王の人気によるところが大きいのだ。

「そっちのべっぴんさんは誰だべさ？」

田舎者丸出しの国王陛下が、肩に鍬を担いだまま僕の隣を指差す。見れば、帝国からの使者であるハナ様が、あんぐりと口を開けて言葉失っていた。

国王との謁見を希望したのに、芋畑で泥だらけになって働く農民を紹介されれば、誰でもこんな顔になるだろう。僕は背筋を伸ばすと、礼儀正しく紹介した。

「こちらは帝国軍所属の研究員ハナ様です。陛下との謁見をご所望とのことなので、お連れ致しました」

「帝国軍！」

驚いた国王は手ぬぐいで顔を拭くと、ぼさぼさ頭を手櫛で整え、表情を引き締めた。

「うむ、朕がユ国国王ドーゴ三世である。帝国からお越しとは遠路はるばるご苦労であった。して、我が国にいかなる用向きか」

王様らしく堅苦しい言葉遣いで応対する国王陛下。ここが芋畑で、服装が泥まみれの野良着である時点で諸々手遅れだけど。

「あ、あの、私、帝国軍聖遺物研究所の研究員で、ハナマキと申します！ ほ、本日は、陛下にお願いがあつて参りました！」

我に返ったハナ様は、祈るように両手を胸の前で合わせ、背の高い国王陛下を見上げた。

「私に、温泉を調べさせてくださいっ！」

熱い思いがこもった真摯な叫びを受け、国王陛下はキョトンとしながら僕を見る。

「……温泉ってなんだべ？」

「さあ？」

聞き慣れない単語に首を傾げる僕たち親子。その隣で「がーん！」という表情を浮かべてショックを表現するハナ様。そんな驚いた顔されても知らないものは知らないから。

「お、温泉というのは、温かい泉のことです」

「温かい泉？」

ひよっとして王宮の露天風呂で使っている、火山のマグマで温められた地下水のことを言っているのだろうか。だけど、帝国の人間が温かい地下水の何を調べると言うのか。

国王陛下も同じように思ったらしい。僕の顔を見て首を傾げると、すぐさま威厳を保つように背筋を伸ばした。

「よかろう。温泉とやらの調査を許可する。ただし、調査内容と結果をそこにいるアリマに報告することが条件だべ……条件だ」

「あ、あの、堅苦しい言葉遣いがお嫌なら、普段のしゃべり方で構いませんが」

「んだべか？ ほだばそうさせてもらうべさ。いや、王様らしくするのは肩が凝っていかんべさ」

碎けすぎだろ！ 心の中で叫びつつ、ぐっと堪える僕だった。

「ほだば、アリマ。お前がこのべっぴんさんを案内してやれ」

「僕が……ですか？」

表面上は丁寧な言葉遣いで問い返すが、内心では「ふざけんな、こっちは貧乏国家の財

政再建で忙しいんだ、余計なことに構ってられるか」と不満たらたらだ。

そんな僕の不満にも気づかず、朗らかな国王陛下は、のほほんと笑いながら命令する。

「んだんだ。帝国からの賓客には、それなりの人間を付けるのが筋だべさ。王子であるアリマなら文句なかんべ」

「王子!？」

僕のことを何だと思っていたのか、ハナ様がメガネの奥で目を丸くする。

「す、すみません！ てっきり下つ端の門番だとばかり……失礼しました！」

「その発言が一番失礼ですね」

「あわあわ」と悶えながら僕と国王を交互に見比べるハナ様は、さながら二匹の猫に挟まれた憐れな鼠のようだ。

……帝国軍にはもつとマシな人材はいないのか。

よその国の軍隊を本気で心配したくなる僕だった。

王宮の露天風呂がいつでも適温なのは、地熱で温められた湧き水を——ハナ様風になら「温泉」を——汲み上げ、常時大浴場へと流し込んでいるからだ。そこで僕はまず、温かい湧き水の出所——ハナ様風に言うなら「源泉」——へと彼女を案内することにした。ユ国の王宮は山の裾野に建てられている。質素だが頑丈な石造りの建物は、この地に

あった遺跡を改修したものだ。同様に、山の麓ふもとから王宮まで温泉を引く設備にも、古代人の遺跡が流用されている。

僕は遺跡の一つである、裏山の麓にある山小屋へ……源泉へとハナ様を案内した。「すごい！　これがすべて古代人の遺跡なのですか！」

小屋の地下へと案内されたハナ様が、見慣れない設備に興奮して歓声を上げる。

広い地下室には一面タイル張りが施され、正面の壁には湖に映るヌブル山の風景が大きく描かれていた。側面には滑らかに研磨された鏡が幾つも張られ、ここが高度な文明によって作られた人工的な場所であることを示している。

もちろん、長い年月を経てタイルは半分以上がはがれ落ち、壁や鏡はコケや黒カビによって本来の美しさを大いに損なっているのだけれど。

「浴槽が一、二、三……八つも！　このお湯はすべて温泉なのですか？」

「はい。それぞれ別の源泉から汲み上げた、成分の異なる八種類のお湯です」

補強された八つの風呂桶風呂かには、それぞれに別個の源泉から湯が注がれていた。この中で一番湯量の多い温泉が、王宮の露天風呂に流れ込む仕掛けになっている。

「八種類……。狭い範囲から成分の違う温泉が八つも湧き出るなんて信じられない……」

「そうなのですか？」

「そうなのですよ！　温泉とは地熱で温められた地下水のことです。同じ土地の温泉なら

ば、源泉の場所が離れていても地下では繋がっているのが普通です。だから成分が異なることはまずありません。それなのに、ここでは同じ土地から八種類もの温泉が湧き出ている……。すごいです！　本当にすごいです！」

よほど温泉が好きなのだろう。さっきまでの気弱さが嘘うそのように、彼女は目を輝かせて熱弁を振るっている。

「裏山にはことと同じような源泉が幾つもあります。どれも成分の違う温泉なので、良ければそちらも案内し——」

「全部成分が違う!？」

両目をくわっと見開いたハナ様が、僕の胸ぐらを掴つかんで引き寄せる。

「お、おとお教えてください！　いったい何種類の温泉がここにはあるんですか！」

「え、ええと、全部で二百種類ぐらいかな？」

「二百種類!？」

ハナ様は僕を突き飛ばすと、微笑ほほえみながら地下室の中央でくると回り、祈りを捧たもげるように両手を胸の前で組んで片膝かたひざをついた。

「神よ。ここは天国です。温泉パラダイスです……」

キラリ。メガネの下から感激の涙がこぼれ落ちた。

「そこまで感激するなんて……。帝国では温泉がそんなに珍しいんですか？　僕にはそれ

ほどありがたい物とは思えないのですが」

二百種類の温泉と日常的に接してきた僕が素朴な疑問を口にする、ハナ様は「聞き捨てならない」とばかりに目をぎらつかせ、ずかずかと大腿で歩み寄ってきた。体が密着しそうなほどに接近された僕は、あまりの迫力にのけぞってしまふ。

「いいですか？ 温泉は奇跡の泉です。四〇〇年前、大陸に一大文明を築いた古代人は、温泉が持つ奇跡の力によって若さを保ち、怪我を癒し、万病を克服したと伝えられています」

「温泉にそんな不思議な力が……」

「あるんです！」

ずいっと顔を寄せてくるハナ様。顔が近すぎてメガネが僕の鼻にぶつかりそう。

というか、仮にも女子なのに無防備すぎる。汚れた顔に、ぼさぼさ頭に、色気のないメガネという僕の好みからは大きく外れた外見だけど、彼女の肌からは女性特有の甘い香りが漂ってきて僕はどきまぎしてしまふ。

「で、でも、温泉と言っても所詮はただのお湯でしょう？ お湯にどうしてそんな力が

……」

「魔法です！ 温泉には魔法の力が宿っているのです！」

あらゆる不可能を可能にする神秘の力——魔法。

伝承によれば、古代人は強大な魔法の力によって栄華を極め、強大すぎる魔法の力によって破滅の道を辿ったとされている。時代とともに失われた秘術は、今も世界のどこかで密かに受け継がれているとも……。

そんな伝説の力が、温泉には宿っているのだとハナ様は力説する。

そういうえば、帝国には魔法を研究している専門機関があると聞いたことがあるけど……。

「確かハナ様が所属しているのは、聖遺物研究所、でしたか？」

「はい。古代人が残した魔法に関わる遺跡・遺物を調査する、帝国軍の研究機関です。もちろん、『温泉』も古代人が残した聖遺物の一つです！」

「温泉が？ それは確かなのですか？」

「確かです！ 絶対に間違いありません！」

そ、そうだったのか。いつも入っている風呂が、実は古代人が残した魔法技術の結晶だったなんて、これは驚きだ。

驚愕の事実と言葉を失う僕へ、ハナ様は熱の籠もった口ぶりで温泉の歴史を語る。

「かつてこの地には温泉をこよなく愛する古代人種——『湯人』が暮らしていました。湯人は争いを嫌い、魔法の力を平和のために利用しました。彼らが作り上げた『温泉』こそ、人を癒すことに特化した魔法なのです！ 古文書にはこうあります。『温泉に肩まで浸かりし者、心穏やかになり、闘争心は湯に溶け消え去るであらう。温泉を愛する者、

「たちまち傷は癒え、病を跳ね返し、長寿を得ることが出来るであろう」と

「温泉がそんなにすごいものだったなんて……」

——その瞬間、稲妻の如き天啓が僕の全身を撃ち抜いた。

温泉。それはユ国に与えられた天の恵み。傷を癒し、病をはね除け、長寿を与える魔法の泉。こんなに素晴らしい物を利用しない手はない！

奇跡の泉「温泉」の存在を大々的に宣伝すれば、ユ国は大陸随一の観光地になれる。温泉目当てに観光客がわんさと押し寄せれば、ユ国は今よりずっと豊かになる。

貧しいユ国を救う方法。それは、ユ国を世界一の温泉国家にすることだったんだ!!

「殿下！ アリマ殿下！」

僕が王宮の書庫で古文書を漁っていると、軍服を着た髭面の壮年男性が、どこかかと足音を響かせながら怒鳴り込んで来た。

年相応のしわがれた野太い声。筋肉質なのにでっぷりとして見える寸胴体型。見事に色の抜けた白髪頭に、口元に白い髭をたっぷりと蓄えた髭面。略式とはいえ普段から軍服を着込み、軍靴を響かせながら王宮内を闊歩する彼こそ、祖父の代からユ国に仕える忠義の士、齢六十を超える老将軍イブスキだ。

「こちらでしたか！ 捜しましたぞ！」

「相変わらずイブスキは声大きいね。それに、いつも軍服で息苦しくないの？」

「常在戦場！ 將軍たるもの軍人の鑑でなければなりません！ 一つ戦争が起こっても戦えるように、常に身支度は整えております！」

「ユ国は建国以来一度も戦争したことないけどね」

生真面目が服を着て歩いているようなイブスキは、我が国一番の堅物だ。軍人という職務に誇りを持ち、いつでも自分を厳しく律している。自分に厳しいだけならまだしも、他人にも厳しさを求めるので始末が悪い。

「それよりも殿下！ 帝国の人間を王宮に招いたというのは事実なのですか！」

「ハナ様のことかい？ 確かに僕が王宮を案内してあげたけど」

「なんと愚かなことを！ その者が帝国のスパイだったらどうするおつもりか！ このままでは我が国の内情が帝国に筒抜けになりますぞ！」

「外に漏れて困るような情報なんて何もないだろ。だいたい今の国王になってからは、国民全員が王宮の内情を知ってるよ」

農民たちと仲良く畑仕事をする国王陛下は、身分など気にせず誰とでも気さくに会話を楽しむ人だ。王宮で起こった出来事も陛下にとっては世間話の種でしかない。きつとユ国の国民は、僕が何歳までおねしょをしていたかも知っているに違いない。

「我が国の軍事機密が帝国に漏れることは国防に関わる重大事ですぞ！」

「機密情報なんて知らなくても、帝国が本気で攻めて来たらユ国はひとたまりもないよ」余談だが、ユ国の国軍は総勢で五〇〇人ほどだ。もしも大陸最強を謳う帝国軍が全力で攻めてきたら、三日と保たずに王都は陥落するだろう。もっとも、王都に到着するまでに険しい山道を数週間かけて行軍しなければいけないが。

まあ、攻めて来ないとわかっているから、こうして笑い話に出来るのだけだ。

「し、しかし」

「イブスキは心配性だね。そこまで言うなら実際にハナ様に会ってみればいいよ。そうすれば、彼女が人を騙すような人間じゃないとわかるはずだ」

「なんと！ 今日初めて会った者をそこまで信用されるとは……。おのれ帝国の女狐め！ アリマ殿下の純粋なお心につけ込むとは、許せん！」

「イブスキはもっと人を信じるようにした方がいいと思うよ」

「殿下こそ簡単に他人を信用しすぎです！ 人が好いのは結構ですが、何でもすぐ鵜呑みにしてはいいつか痛い目にあいますぞ！」

「失礼だな。僕のどがお人好しだって言うんだよ」

石頭のイブスキを相手にするのは疲れる。僕は彼との話を打ち切ると、古文書の読解作業に戻ることにした。

「殿下は先ほどから何を読まれているのですか？」

「かつてこの地に住んでいた『湯人』に関する資料だよ」

「湯人、ですか？」

「湯人について調べれば、温泉で国を立て直すためのヒントが見つかるかと思つてね。ほら、これなんて面白いと思わないか？」

イブスキにも見えるように、古文書のページを大きく開く。そこには木造の家屋らしき建築物が描かれていた。

「これは『旅館』という建物だ。湯人はここで料金を払つて温泉に入り、日々の疲れを癒していたそうだ。……そうか、ひらめいたぞ！ ユ国の王宮を改築して温泉旅館にするんだ！ そうすれば国外から来た人でも安心して温泉を楽しめる！」

「し、しかし殿下」

「殿下ではない！ 今日から僕のことを番頭と呼べ！」

「は？ いったい何を!?」

「古文書によれば、温泉旅館の最高責任者は『番頭』と呼ばれていたそうだ。決めたぞ、イブスキ。僕は新時代の番頭になる!!」

癒しと安らぎの伝道師「湯人」の文化を現代に甦らせる。それが新時代の番頭である僕の使命！ 温泉旅館が軌道に乗れば、ユ国は観光地としての成功を約束されたも同然だ。古文書を繙きながら、僕は輝かしい未来へと思いを馳せる。ふふふふ、あははは。

「で、殿下が、女スパイの甘言に毒されていく。早く手を打たなければ……」  
輝かしい未来に思いを馳せていた僕は、イブスキの深刻な声にも気づかなかった。

その夜。古文書の読解に丸一日を費やした僕は、心地良い疲労感を味わいながら露天風呂へと足を運んだ。疲れたときは風呂で一汗かいてさっぱりするのが僕の習慣だ。

脱衣所で素っ裸になった僕は、全裸の開放感に浸りながら浴室の扉を開ける。露天風呂ならでは、外の冷気と湯気の熱さが肌に心地良い。

「……あれ？」

無造作に湯船へと歩み寄った僕は、湯気の間こうに人影が見えて思わず足を止めた。

どうやら先客がいたようだ。「いったい誰が」と目を凝らしてみると……人影は、見覚えのない若い女性だった。

こちらに背を向けているので顔はわからない。胸元まで湯に浸かり、手のひらで湯をすくっては肩にかけて「はあ……」と艶っぽい吐息を漏らしている。

華奢で色白な背中は日焼け跡一つない清らかさ。瑞々しい白い肌と、肩胛骨を流れ落ちる水滴が、月光を浴びて妖しく輝いている。濡れないように髪をアップにまとめており、白いうなじに貼り付くほつれた髪の毛がたまらなく色っぽい。

「……。」



僕の視線に気づいたのか、入浴中の女性がこちらを振り返る。

美少女だった。彼女の清纯さと可憐さに、僕は一瞬で魂を鷲掴みにされてしまった。

入浴中の美少女と、全裸の僕が、湯気を挟んで見つめ合う。この状況を僕はどう受け止めればいい？ 僕はこれからどうすればいい？ 突然の事態に前を隠すことも忘れて立ち尽くしている……可憐な美少女は眼を細め、あろうことか湯船で立ち上がった。

「ちよ、待った！ 君、見え、見え——」

純情かつチキンの僕は、片手で自分の目を遮りながら、無防備な少女に警告する。ほんの一瞬だけ垣間見えた裸が……お湯に濡れた曲線美が、瞼に焼き付いて離れない。

「え？ その声は」

美肌を露わにしたまま、露天風呂の美少女が僕を見つめる。

あれ？ 今の彼女の声、聞き覚えがあるぞ。まさか、ひよっとして……。

「……ハナ様、ですか？」

「……」

彼女は静かに腰を下ろし、「ちゃぶふん」と肩まで湯に浸かると、湯船の端へと移動した。

「めがねめがね」

小声で囁きながら、彼女は湯船の端を手探りする。そこに置いてあった度の強い丸メガネを掴み、装着して、改めて僕を見た。

「きゃ——っ！！」

「ギャ——ッ！！」

つられて僕も悲鳴を上げる。って、錯乱してる場合じゃない！

「お、落ちていてください。どうしてハナ様が王宮の露天風呂に入っているのですか？」

「わ、わわわ私は、た、たたたた旅の汚れを落とそうと思って」

湯船の隅で体を丸めて縮こまるハナ様。そんなに僕が怖いのか、あからさまに怯えている。うん、まあ、入浴中にいきなり全裸の男が入ってきたら普通は怯えるよね。

そういえば昼間のハナ様は、髪はぼさぼさで全身泥だらけのひどい有様だった。風呂に入って旅の汚れを落としたいと思うのも当然だ。

「ア、アアアアア殿下は、どどどうしてここに？」

「どうしてって、ここは王族専用の浴場ですから」

僕は壁に掛かっている紋章を——三本の稲妻をあしらったユ国の紋章を指し示す。

「王族……専用？」

どうやら知らずに入浴していたようだ。ハナ様の顔色が見る間に青ざめていく。別人のように綺麗になったハナ様が、あたふたとろたえる姿はやけに滑稽で、和んだ僕はようやく冷静さを取り戻すことが出来た。

王族専用とは言うものの、王族以外が入ってはいけない決まりはない。それにちよっと



だけ眼福がまぐだったし、ここは僕が引くのが円満な解決法だろう。

「ハナ様が入浴中とは知らず、失礼しました。僕は部屋に戻りますので、ハナ様はごゆるりと露天風呂をお楽しみください」

「い、いえ！ 出るなら私が！」

慌てたハナ様が湯船で立ち上がり、ハツとした様子で体を隠してお湯に潜る。

ちなみに純情かつチキンな僕は、せっかくの眼福チャンスだったのに、とっさに彼女から目を逸そらしていた。うう、恥ずかしさで顔から火が出そうだ。

「そ、それでは、僕はこれで……」

「あ、あの」

退去しようとする僕を、ハナ様のか細い声が引き留める。

「ア、アリマ殿下は、お風呂に入りに来たんですよね？」

「そうですけど……」

「じゃ、じゃあ、一緒に入りませんか？」

……は？

「何を言ってるんだこの人は」と思いながら、僕は湯船を振り返る。ハナ様は恥ずかしさを堪えるように、顎あごまで湯に浸かりながら上目遣いに僕を見ていた。

「ゆ、湯人には、『混浴』という文化があったそうです。男女が一つの湯船に入るのは、

決して恥ずかしいことではないと……だから、その……」

どうやら彼女は、自分のせいで僕を追い出すことを心苦しく思っているらしい。そこで考えた円満な解決策が「混浴」という辺りは、発想がかなりズレているけれど。

「ど、どうぞ……」

弱々しくつぶやくと、ハナ様は湯船の中で膝ひざを抱えて僕に背中を向けた。

美少女に「どうぞ」と誘われて、僕は……。

「じゃ、じゃあ、失礼します……」

こうして僕は、ハナ様と背中合わせになりながら同じ湯船に浸かることになった。なんだこの状況は？

今日会ったばかりの美少女と一緒に風呂に入るなんて、なんとというファンタジー。心臓をばくんばくんと鳴らしながら、僕は身じろぎ一つせずつに黙り込む。張り詰めた緊張感に、疲れが取れる気がまるでしない。

「お、お、お」

沈黙に耐えられなくなったのか、ハナ様が声をうわづらせながら会話の口火を切った。

「お、温泉饅頭まんじゅうって、ご存じですか？」

「はい？ まんじゅう？」

「そ、そうです。湯人は温泉饅頭なるデザートを好んで食べていたそうです。それがどん

な食べ物なのか、ずっと気になっていて……」

「それは初耳です。お湯に卵を入れて半熟とろとろのゆで卵を作るのならありますが」

「まさか、それは伝説の温泉たまご!？」

「はい? ただのゆで卵ですが」

「いいえ、違います! 温泉たまごは湯人の時代から連綿と受け継がれてきた伝統食です! 私は温泉たまごにこそ不老長寿の秘密が隠されていると睨んでいきます!」

「そ、そこまで……」

「はい! 古文書によれば、饅頭とたまごは温泉旅館に必要な不可欠なアイテムで——」

温泉の研究に人生を捧げているハナ様は、温泉話になると我を忘れるようだ。いきなりの熱弁に驚いた僕が振り返ると、さっきまで背中を向けていたはずのハナ様が四つん這いの体勢で間近まで迫っていた。

「あ……」

そのまま僕たちはしばし見つめ合い、どちらからともなく目を逸らす。再び背中合わせになって膝を抱える僕たち。のぼせたわけでもないのに、やけに顔が熱い。

気まずい空気のまま、しばしの沈黙。……やがて、ハナ様は声をうわずらせながら再び会話の口火を切った。

「お、お、温泉たまごは、美味しいですか?」

「ぶっ」

僕は吹き出しそうになるのを必死に堪える。なぜだろう。ハナ様の言動はどこかズレていて愛嬌がある。つまり、平たく言うと、なんだかすごく可愛い。

「美味しいですよ。明日にでも仕事場にお持ちしましょう」

「そ、それは楽しみです」

「よろしければ、温泉旅館に必要なものを他にも教えていただけませんか?」

僕は王宮を改築して温泉旅館にする計画をハナ様に打ち明けた。期待通り、温泉語りが大好きな彼女はこの話題に食いついてくれた。温泉旅館について僕の知らなかった情報をたくさん教えてくれたのだ。

「湯人の民族衣装である『浴衣』は必須だと思います。浴衣は温泉旅館の正装ですから」

「浴衣か。なるほど、さっそく調べて職人に作らせましょう」

「それから、旅館には番頭の他に『仲居』や『板前』という職種があります」

「それなら古文書で読みました。確か、板前は料理人のことですよ。仲居は……ホステスのようなものですか?」

「いえ、むしろメイドが近いのではないかと」

湯船で背中合わせになりながら、僕たちは温泉談義に花を咲かせる。初対面のときはまともに喋れない内気な子だと思っただけど、どうしてどうして、よく笑ういい子じゃないか。

「……温泉の力ってすごいですね」

盛り上がった温泉話が一区切りついたところで、ハナ様はしみじみとつぶやいた。

「私は人と話すのが苦手で、なかなか他人と打ち解けられなくて……。ここまで誰かと気軽に話せたことは今までありませんでした」

「それも温泉の力だと?」

「はい。湯人の国には『裸の付き合い』という格言があります。一緒に温泉に入れば、身も心も解放されてすぐに打ち解けられるという意味です」

僕との会話が弾んだのは、ハナ様にそれだけの魅力があるからだと思うけど。

そう思ったものの、そのまま言うともまるで冷やかしのよう受け取られかねないので、僕は口を挟むのを控える。

「殿下とこれほど打ち解けられたのは温泉のおかげです。温泉に感謝しないとけませんね」

「その『殿下』と言うのは止めにしませんか?」

これも温泉の影響だろうか。裸の付き合いをした彼女へ、僕は自然に提案していた。

「僕のことアリマでいいですよ」

「……では、私のことはハナと呼んでください」

背中越しに、照れながらも楽しそうなハナ様の……ハナの声が返ってきた。くすくすと

声を殺して彼女は笑う。

「私、同年代の男の人とこんな風に話せたのは初めてです。これが混浴なんですね。これが裸の付き合いなんです。私、決めました。これからはいろんな人と混浴します!」

「うん。それはやめた方がいいと思う」

そうして僕たちは背中合わせのまま、夜が更けるまで語り合った。

少しのぼせた。

数日後。ハナに誘われた僕は、温泉たまごを持って裏山へと赴いた。

温泉を調べるのに都合がいいからと、ハナは源泉を管理している山小屋に寝泊まりしている。何度か訪ねたことがあるが、ハナが持ち込んだ研究資料によって小屋はさながら温泉研究所と化していた。

「それにしても、馬なんて何に使うのかな?」

馬の手綱たづなを引きながら、僕は山道を登る。ハナから「駄馬を一頭用意して欲しい」と頼まれたので連れてきたけれど、わざわざ「駄馬」と指定するのはどういう意図なのか。

「アリマ」

馬を連れて斜面を登っていると、山小屋の前で手を振るハナが見えた。まだ呼び捨てに慣れていない彼女は、僕の名を呼びながらはにかんでいる。

「こんにちは、ハナ」  
「こ、こんにちは」

緊張しながら、たどたどしく頭を下げるハナ。温泉の話をするとき以外はいつもこんな調子なので、彼女の挙動不審な姿もさすがに見慣れていた。

「言われた通り馬を連れてきたけど、これで何をやるの？」

「今日は……私がここでどんな研究をしているか、ちゃんと話しておこうと思って……」

これから何が始まるのかと思っていると、ハナはポケットから試験管二本を取り出した。「これは、この山で採取した源泉のサンプルです。試験管には、別々の場所で採取した成分の異なる温泉水が入っています」

興が乗ってきたのか、説明するハナの舌が徐々に滑らかになっていく。普段もこのくらいしゃべってくればいいのにも思いながら、僕は黙って彼女の話を耳を傾けた。

「まず、この温泉Aを馬にかけます」

どぼどぼどぼ。ハナは片方の試験管に入っていた温泉を馬の背にかけた。

「次に、この温泉Bを馬にかけます」

どぼどぼどぼ。ハナはもう一本の試験管の中身を馬の背にかけた。

これから何が始まるのか。

そう思う僕の目の前で、馬がマグロになった。

「……………マグロ？」

さっきまで馬がいた土の上で、体長二メートル程のマグロがぴちぴちしている。

予想外の出来事に、僕の理解が追いつかない。とにかく目の前で起こったことをそのまま表現すると、「馬にお湯をかけたら一瞬でマグロに変身した」ということだ。言ってる僕自身も何が何だかさっぱりわからない。

「これが温泉です！」

両手に試験管を一本ずつ持ったハナが、胸を張って宣言する。

「温泉はその泉質によって疲労回復、健康促進、傷の治療など多彩な効果を発揮します。それらはすべて温泉に秘められた魔力成分の作用によるものです。そして、複数の温泉を組み合わせれば魔力成分を変質させることが出来る。温泉と温泉を混ぜ合わせることで魔力成分を変化させ、奇跡の力を持つ温泉を作り上げる……これが私の研究です！」

衝撃の事実には、僕は返す言葉が見つからない。

ハナが調合した温泉には「馬をマグロに変える」効果があった。にわかには信じがたいけど、目の前でぴちぴちしているマグロを見せつけられたら事実として受け入れざるを得ない。

「これは魔法なのか？」

「いいえ、魔法ではありません。古の湯人は温泉の奇跡をこう呼びました。……『効能』

と！」

「効能!!」

「魔法」ならぬ「効能」を目の当たりにして、僕の心は興奮に打ち震える。

だってそうだろう？ 温泉の効能を自由に使いこなせれば——自在に奇跡を起こせれば、どんな願いだって叶えられるじゃないか!

「つまり温泉の組み合わせ次第で、肉体改造、性格変化、超能力付与、変身、再生、増毛など、どんな奇跡も起こせるということか……!」

「理論上はそうです。ですが……!」

興奮気味に解説していたハナが、表情を曇らせる。

「どの温泉とどの温泉を掛け合わせたらどんな効能になるかは、実際に試してみなければわかりません。実験で一つ一つ検証するしかないんです。目当ての効能を見つけ出すだけで果たして何年かかるか。すべての効能を解明するには何十年、何百年とかかるかも……!」

確かに、この山だけでも二百以上の源泉が存在する。二種類の温泉を組み合わせるとして、組み合わせパターンは数万通り。三種類以上の組み合わせも含めれば桁外れな数になる。

しかも調査した温泉がどんな効能を発揮するかは、試してみなければわからない。さっ

きの例で言えば、馬に温泉をかけてみなければ「馬がマグロになる」効能は永遠に発見できなかつただろう。そして普通、馬に温泉はかけない。

そんな作業を何万回と、しかも手作業で調べるなんて気の遠くなる工程だ。

「ハナはすごいな。こんなすごい研究を一人ひとりでやっていたなんて尊敬するよ!」

「私はすごくなんてありません!」

素直に感心する僕へ、うつむき、か細い声でハナが答える。

「私は無能です。誰からも期待なんてされていないんです。だから……!」

いつにも増して自信がなさそうなハナの表情。何かを思い詰めている様子が気になった僕は、彼女を元気づけてあげようと無意識にハナへと手を伸ばす。……だが、

「殿下! その女に近づいてはなりません!」

聞こえてきたしわがれた声に、僕は伸ばしかけた手を止めた。

振り返れば、老將軍イブスキと、革鎧を着込んだ数人の兵士が山道を登ってくるのが見えた。何ごとかと戸惑う間に、駆けつけた兵士たちが素早くハナを取り囲む。僕が見ている前で彼らはハナの腕を掴み、力任せに地面へと引きずり倒した。

「何をしている! ハナを離せ!」

「いけません!」

駆け寄ろうとした僕をイブスキが押しとどめる。

兵士に拘束されたハナが、不安そうな目で僕を見る。本人も何が起こっているのか理解できていないのだろう。彼女の瞳は動揺と恐怖で彩られていた。

「説明しろ、イブスキ！ なぜ彼女にこんなことをするんだ！」

「その者が己の企みのために殿下をたぶらかしているからです」

「ハナを侮辱するのか！ 僕はたぶらかされてなんか——」

「その女は聖遺物研究所の研究者ではありません！」

イブスキがはっきりと言い切り、僕は言葉を失う。僕の祖父の代から王家に忠誠を誓っているイブスキは、誰よりも実直な男だ。こんなことで嘘をつくとは思えない。

絶句しながらハナを見ると、正体がばれたことに驚いているのか、彼女はメガネの奥で目を大きく見開いていた。

冷静に、忠義の老將軍は事のあらましを語り出す。

「殿下とその者が急速に親しくなるのを不審に思い、念のため帝国側に確認いたしました。その結果、ハナさまキなる研究員は存在しないとの報告を帝国側より受けました。その女は帝国軍聖遺物研究所の名を騙り、殿下に取り入ろうとしたのです」

「僕に取り入るって……何のために？」

「それを今から吐かせます」

イブスキの合図で兵士たちがハナを引っ立てる。抵抗する気力もないのか、ハナは促さ

れるまま兵士に連れられて歩き出した。

「ハナ……」

僕の呼びかけも届かず、ハナは茫然自失の体で僕の横を通り過ぎる。イブスキは僕に敬礼すると、兵士とともにハナを連れて山を下りていった。

その場には、呆然と立ち尽くす僕と、ぴちぴち跳ねるマグロだけが残された。

「……僕はハナに騙されていたのか？」

連行されたハナを追いかけて夕闇迫る山道を歩き始めた僕は、しかし不安が頭から離れず、どうしても前を歩くイブスキたちに追いつけずにいた。

のろのろと山道を下りながら、思い出すのは……ハナの顔。ハナの声。ハナの仕草。

人見知りでいつもおどおどしていたハナ。汚れを洗い落としたり、美少女の素顔が現れたハナ。温泉について語り出したら止まらないハナ。露天風呂で背中合わせになりながら、楽しく笑いあったハナ。あれが全部嘘だったとは思えない。——思いたくない。

「やっぱり納得できない」

誰にともなく、ぼつりとつぶやく。

「確かめよう。ハナに会って、彼女の口から直接話を聞くんだ」

重かった僕の足取りが、徐々にペースを上げていく。ハナに会いたい、会って話を聞き

たい。その思いが強まるほどに、僕の歩みは速くなる。今ならまだ間に合う。急げばイブスキたちに追いつけるはずだ。

そうして王宮のそばまで来たところで、僕は異様な雰囲気気がついた。王宮の出入り口に人が集まり、往來を兵士たちが慌ただしく行き交っている。王宮周辺はまるで蜂の巣をつついたような騒ぎになっていたのだ。

「アリマ殿下！」

顔見知りの衛兵が、僕を見つけて血相を変えて駆け寄ってくる。狼狽する衛兵を見て、僕はこれがただならぬ事態だと察した。

「これは何の騒ぎ？」

「は、はい！ たった今、ユファイ様がドラゴン退治から戻られて——」

言葉を濁すべきか迷ったのか。衛兵は口ごもり、それから意を決したように口を開いた。「ユファイ様は重傷を負い、死にかけています！」

「ユファイ！」

僕がユファイの寝室に駆けつけたとき、部屋は肉の焼け焦げた匂いが充満していた。ベッドで横たわるユファイを見て、僕は「うっ」と口元を押さえる。ユファイは、ドラゴンの炎によって全身を焼かれていた。

瑞々しかつた柔肌はもはや見る影もなく、見える範囲の皮膚はほとんどが赤黒く焼けてだれている。端麗だった顔も左半分が火ぶくれで腫れ上がり、何者かわからないほどに変わり果てていた。

今さらながら、僕は綺麗な姉を自慢に思っていたのだと自覚する。彼女の美貌を根こそぎ奪われた事実が、姉に抱いていた憧憬を自覚させる。

吐き気を堪えながら壁にもたれかかった僕は、そこで初めて国王陛下とイブスキが部屋に居ることに気づいた。陛下は変わり果てた娘の姿にも眉一つ動かさず、毅然とした態度で彼女の傍らに立っていた。

「陛下……ユファイは……」

僕の短い問いに、国王陛下は力なく首を横に振る。

「医者は生きているのが奇跡だと……」

そんなこと見ればわかる。ドラゴンの炎に全身を焼かれたんだ。並みの人間ならとつくに死んでいる。

「どうしてこんなことに……」

僕の口をついて出た疑問に、答えたのは、僕より先に駆けつけていたイブスキだった。

「ヌブル山の竜王は、我々の想像を遥かに超えた強さだったそうです。勝てないと悟ったユファイ殿下は、せめて兵たちだけでも逃がそうと一人で竜王に立ち向かい……」

ヌブル山の主と言われている最凶の火竜——竜王ラドンに、ユフィは単身で戦いを挑んだ。部下の兵士たちを逃がすために、ユフィは自ら囿をりになった。

竜王が去った後、兵たちはユフィを探しに戻り、変わり果てた彼女を発見した。彼らはユフィを担いで山を下りると、一睡もせずにここまで運んだのだそうだ。

遠目からでは生きているか死んでいるかもわからない姉の惨状に、僕は足が震えて倒れそうになる。

……どうしよう。僕のせいだ。

僕のためにユフィはドラゴン退治に出かけたんだ。僕のせいだ。僕がユフィを殺したんだ。

僕は倒れそうになる体を必死に支えながら、覚束おぼつかない足取りで部屋を出る。ふらふらと廊下をさまよい歩き、足をもつれさせ、力尽きたように座り込む。

僕は無力だ。目の前でユフィが死にかけているのに、僕には何も出来ない。

このままではユフィは死ぬ。このままでは……。

「アリマ？」

不意に名前を呼ばれ、僕はハツとして顔を上げる。

連行される途中だったのだろう。部屋の外には、両手首を縛られたハナが兵士に挟まれる形で立っていた。

「大丈夫ですか？ なにがあったんですか？」

きっと僕は、今にも死にそうな顔をしていたに違いない。ハナは自分の置かれている状況も忘れて、真つ先に僕を心配してくれた。ハナの声を聞いただけで、僕は堪こらえていた感情があふれそうになった。

「ユフィが……姉が大やけどで死にかけているんだ」

嗚咽おとち混じりの声で答えると、僕はわらにもする思いでハナの足にしがみつく。

あの大やけどを見ればユフィが助からないのは誰だれの目にも明らかだ。それでも、もしもユフィを救う方法があるなら……奇跡を起こす可能性があるとしたら……。

僕はハナの手を握る。この手を絶対に離すまいと、ハナが痛がるのも無視して握り締める。

「ハナ。温泉の力でユフィを助けてくれ。お願いだ」

「でも、私は……」

「おやめください、殿下！」

ハナが答えようとした、そのとき。ぱたぱたと床を踏み鳴らしながら、老将軍が部下を引き連れて現れた。座り込んでいた僕の体を、兵士二人が問答無用で引っ張り上げる。ハナと繋つないでいた手が、いともたやすく引き離される。

「離せ！ 僕はハナに用があるんだ！」



「血迷われたか！ この者は帝国のスパイですぞ！」  
 「違う！ ハナはスパイなんて出来る子じゃない！ 僕はハナを信じる！」  
 イブスキは何も言わず、ただ哀れむような目で僕を見る。どうしてだよ！ どうして僕の言うことを信じてくれないんだ！

「お願いだ、イブスキ。彼女を解放してくれ。ユフィを助けるにはハナの協力が必要なんだ」

「殿下。この女に何を吹き込まれたか知りませんが、ユフィ殿下を助けることなど誰にも出来ません。この女は殿下の優しいお心につけ込んで利用しているだけです」

「そうじゃない。ハナと温泉の力があればユフィを助けられるんだよ」

「温泉？ いったい何を言ってる……」

「温泉には奇跡を起こす力があるんだ。僕はこの目で見たんだよ。ハナが、馬をマグロに変えるところを！」

「殿下……おいたわしや……。なぜこの女に騙されていると気づかないのですか」

「僕は騙されてなんかいない！ 僕は、馬がマグロになる瞬間をこの目で見たんだ！」

「馬がマグロになるわけないでしょう！」

「この石頭！ どうして信じてくれないんだ！」

僕とイブスキの怒鳴りあいは、平行線のまま一向に交わる気配を見せない。こんなこと

をしている場合じゃないのに。ユフィを救うには一分一秒も無駄に出来ないのに。

焦るほどに、僕は冷静な判断力を失っていく。そうして半ばパニックに陥っていた僕を救ったのは、混乱した場にそぐわない凜とした女性の声だった。

「私にやらせてください」

いつもおどおどしている彼女と同一人物とは思えない、引き締まった張りのある声。堂々と胸を張るハナの瞳には、覚悟を決めた者ならではの強い光が宿っていた。

「私に、アリマのお姉さんを救う手伝いをさせてください」

迫力すら感じさせるハナの声に、イブスキが目に見えて威圧される。

「だ、だが……」

「もしも救えなかったときは、私の首をはねていただいで構いません」

老將軍の戸惑いを押し切るようにハナが断言する。鬼気迫る彼女の態度に、その場にいる全員が、ハナは本気で言っているのだと認めざるを得なかった。

——かくて、ユフィの命運は温泉学者ハナの手に託された。

「こ、こここ怖かったです」

山小屋へ戻るなり、ハナは涙目でがくがくと震えだした。啖呵たんかを切ったことを今になってびびっているようだ。反応が遅すぎると言うべきか。山小屋に到着するまでよく我慢し

たと言うべきか。

「格好良かったよ。正直言って見直した」

腰砕けになつているハナに手を貸しながら、僕は彼女を小屋の奥へと導く。

イブスキの許可を得て解放されたハナは、さっそくやけどに効く温泉を調査するべく、源泉を管理している山小屋へと戻つて来た。

もちろん、ハナが逃げないように見張りの兵士が小屋の周囲を固めている。状況としてはハナの監禁場所が牢屋ろうごから山小屋に変わったただけだ。それだけでも堅物のイブスキにしてみれば大変な譲歩じやうぶだけだ。

「それで、まず何をすればいい？」

手伝う気まんまんの僕が、目に涙をためているハナに今後の方針を尋ねる。イブスキの前であれほどの大見得を切つたんだ。きっとハナには温泉を作るめどが付いているに違いない。

「ええと……どうしましょう？」

とても頼りない答えが返ってきた。

「ごめんなさい、さっきは勢いであんなこと言ってしまつて」

「勢い？ 勝算があつて言つたわけじゃなかったの？」

「だって、アリマがいじめられているのを見たら、黙つていられなくて……」



先ほどの毅然とした態度が嘘うそのような弱りきった声。小動物のようにつぶらな瞳ひとみをうるうるさせて、すっかりいつもの臆病おびじょうなハナに逆戻りだ。

「僕はいじめられていたわけじゃないよ。イブスキは頭が固くて融通が利かないけど、忠節に厚いいいやつだから」

イラッとさせられることも多いけど、何だかんだ言って僕はイブスキのことが嫌いじゃない。だからなのか、僕は無意識に彼のフォローをしていた。出来るなら、ハナにもイブスキを嫌いになって欲しくなかったから。

「策がないなら考えよう。ユフィを助けられないとハナも首をはねられるんだから」

「は、はい。ええと、それでは」

ハナは柵しほりに置かれていた本を手取る。

「馬をマグロに変える温泉」は古文書に記されていた成分を参考にして調合しました」

「なら、古文書を調べて『やけどを治す温泉』の成分がわかれば……」

「ですが、私の持っている古文書に成分が記されていたのは『馬をマグロに変える温泉』と『蟻ありをベガスに変える温泉』の二つだけです」

「えらく内容が偏っている気がするけど、まあいいや。それで、どうしたらいい？」

「工国の書庫には湯人に関する書物があるそうですね。そこに手がかりがあるかも……」

「わかった。書庫を探してくる」

兵士に見張られているハナは山小屋を離れられない。僕は本探しを引き受けると、さっそく出口へ向かった。

「アリマ」

山小屋を出て行くこうとした僕を、ハナが呼び止める。

振り向くと、ハナは照れくさそうに両手の指を絡めてもじもじしていた。

「……私を信じてくれて、ありがとう」

よっぽど恥ずかしいのか、顔を真っ赤にしながらハナはか細い声で囁ささやいた。

——絶対に、ハナもユフィも死なせない。

僕は黙ってうなずくと、山小屋を飛び出した。

山小屋に持ち込んだ書物の山を、僕たちは片っ端から読み崩していく。二人がかりで本を読みあさり、ようやく「やけどを治す温泉」の記述を見つけたときは手を取り合って喜んだ。

だが、これはまだスタート地点でしかない。何万通りとある温泉の組み合わせパターンから、この成分になるような温泉の配合を見つけ出さなければいけないのだ。

「どうやって見つけ出すの？」

「成分がわかれば、どの源泉を組み合わせればいいのかの目処めどが付きます。あとは考えつく

組み合わせをしらみつぶしに試してみただけです」

「でも、温泉を混ぜ合わせたら成分が変質するって前に言ってなかった？ それで狙い通りの成分を作れるの？」

「ですから、ここから先は、上手くいくかどうかは運次第です」

人事を尽くしたら、後は運を天に任せるしかない。しらみつぶしという時間のかかるやり方で、果たしてユフィの命が尽きる前に温泉を完成させられるのか……。

「ごめんさい。私にもっと才能があれば」

僕の顔に失望の色が浮かんでいたのか。ハナが申し訳なさそうに肩をすばめる。

「ハナは何も悪くないよ」

僕が落胆を押し隠すと、ハナは試験管を持つ手を動かしながら暗い表情で語り始めた。

「昔からそうなんです。私は無能で役立たずだから、研究所から見捨てられたんです」

なぜハナはユ国へ来たのか。なぜ自らを聖遺物研究所の研究者と名乗ったのか。ぼつぼつとハナは事情を打ち明ける。

「私は聖遺物研究所の一員でした。でも、研究所ではずっとお荷物だったんです」

結果を出せない人間に価値はない。帝国の社会にはそういう風潮があるらしい。聖遺物研究所に勤めるハナは、一途に温泉の研究を続け、しかしまったく実績を上げられずにいた。

「研究所の誰も私の話を信じてくれませんでした。温泉には奇跡の力がある、温泉の力で馬をマグロに変えられると論文に書いても、笑われて馬鹿にされるばかりでした」

古い価値観に凝り固まった人たちは、斬新な発想を認めようとしめない。歴史を顧みても、奇抜な発想をして迫害を受けた天才の例は枚挙にいとまがない。

ハナが自分のことを「無能」だの「役立たず」だのと蔑むのは、きつと周囲からそう言われ続けたからだ。頭の固い同僚たちには、温泉の研究など異端にしか見えなかった。

「常識」という自分本位の価値観で相手を否定する……それはとても悲しいことだ。

「あるとき、直属の上司に言われました。温泉の力を証明したいなら、本物の温泉を見つけて奇跡を起こしてみせろ。それが出来ないなら研究所を辞めろと」

それはハナへの最後通告。ハナは温泉の研究を続けたい一心で旅に出た。温泉を探して帝国全土を巡り、辺境の小さな国に温泉があるという噂を聞きつけた。

それがユ国。無名の小国であり、世界一の温泉大国。

「ユ国で私はついに悲願を果たしました。やっと温泉の奇跡を実証できたのに……。研究所はとつとくに私を除名処分していたんです。私が旅に出ている間に、まるで厄介払いをするみたい……」

研究一筋に生きてきたハナにとって、聖遺物研究所の研究者という身分は心の拠り所だったはずだ。それなのに、イブスキから「研究所にハナという研究者はいない」と聞か

された。ハナは聖遺物研究所に裏切られたと知った。イブスキの一言でハナは何を失ったのだろうか？ 帰るべき場所？ 研究者としてのプライド？ それとも、温泉の研究に費やしてきた彼女の人生すべてを否定されたのか？

「私にはもう何も残っていません。帰る所も、研究を続ける意義も……」

「……帰る場所がないなら、ずっとここにいればいい」

作業の手を止めたハナが戸惑いの眼差しで僕を見る。僕はなぜだか目を合わせられなくて、作業を手伝うフリをしながら早口でまくし立てた。

「だって、ほら、ハナがいれば温泉の力でいろんな人の願いを叶えられるだろ？」 『願いが叶う奇跡の温泉』という評判が広まれば、世界中から観光客が集まるに違いないよ。そうすればユ国も豊かになって、国民も幸せになれる。そうなることが僕の夢だから……」

自分でも何が言いたいのかわからないまま、僕はハナを見つめる。

「……だから、僕にはハナが必要なんだ」

僕たちは作業の手を止めて見つめ合う。

何秒ぐらいそうしていただろうか。見つめ合った僕たちは頬ほおを朱に染め、どちらからともなく視線を逸そらして、黙々と作業を続行した。

「出来た」

ろうそくの明かりに照らされながら、ハナが試験管を掲げて見せる。

試験管に入っているのは、苦労に苦労を重ねて完成させた調合済みの温泉。ハナの計算通りなら、古文書に記されていた「やけどを治す温泉」と同じ成分になっているはずだ。

「やった……」

徹夜で作業を手伝っていた僕は、そこでようやく窓から朝日が差し込んでいることに気がついた。ろうそくの明かりなどとうに不要となっていたことに、僕たちはまったく気づいていなかった。

「やったね、ハナ。一晩で完成させるなんてさすがだよ」

「そんなことはありません。運が良かっただけです」

ハナははにかみながら答えると、ごにょごにょと何ごとか口ごもった。「それに、アリマがそばにいてくれたから」とつぶやいた気がしたけど……今は聞き返す時間も惜しい。

「それを持って早くユフィのところへ行こう」

「待ってください。全身のやけどを治すにはお湯の量が足りません。それに」

急ぐ僕を呼び止めたハナは、試験管を持ったまま、ろうそくへと近づく。

「調合した温泉が本当にやけどを治すかどうか、検証しないと」

確かに検証は必要だ。ぶっつけ本番でユフィに温泉をかけて、何も効果が出ないならまだしも、変な効能が発揮されて姉がマグロにでもなった日には目も当てられない。

「でも、効能を確かめるにはやけどをした人を連れてこない……」  
振り向いた僕は、ハナが自分の手をろうそくの炎であぶっている様を目撃した。

「なにやってるんだ！」

ハナに飛びつき、彼女の手をろうそくから引き離す。だがすでにハナの肌は赤く腫れ、ひどい水疱が手のひらに広がっていた。

「なんて馬鹿なことを！ 何を考えているんだ！」

「やけどの人を探すより、やけどの人を作った方が早いですから」

かなり痛むはずなのに、ハナは頬を引きつらせながら無理に笑顔を作ってみせる。

「いくら時間が惜しいからって、どうしてこんな無茶を」

「一秒でも早く完成させて、アリマのお姉さんを助けたいから」

絶対に痛いはずなのに、ハナは笑顔を崩さずに試験管を僕へと押しつける。

「私は、アリマの役に立ちたいんです」

試験管を受け取った僕の手を、ハナの手が包み込む。

「だってアリマは、誰も信じてくれなかった私の話を、温泉の奇跡を、信じてくれたから。アリマだけが私を信じるって言ってくれたから」

ハナの手に導かれるまま、僕は試験管を傾ける。

「だってアリマは、私を必要だと言ってくれたから」

試験管からこぼれたお湯が、やけどをしたハナの手に注がれる。

あんなにひどかったやけどの痕が、嘘のように消え去った。

怒濤どとうの一夜から、数日が過ぎた。

その後、温泉の奇跡によってユフィは一命を取り留め、功績を認められたハナは晴れて自由の身となった。

そして今日。晴れ渡る青空の下、僕は王宮の離れにある源泉に——ハナと二人で温泉の調査を行った山小屋の前に立っていた。

「これでよし」

山小屋の入口に取り付けたプレートを見て僕は満足げにうなずく。そこにはでかかど「温泉研究所」、その下に小さく「所長 ハナマキ」と記されていた。

「今日からここがハナの研究所だ」

隣に立つハナに声をかけると、彼女は両手で口元を隠して瞳をうるうると潤ませていた。

「信じられません。私が研究所を持てるなんて……」

「研究所とは名ばかりの山小屋だけね」

「いいえ。温泉の研究するのにここ以上の場所はありません。ありがとうございます」

ハナの喜びに満ちた笑顔から、彼女の感謝の思いがありありと伝わってきた。

僕だって男だ。美少女にここまで感謝されれば悪い気はしない。ぼりぼりと頬を掻きながら、僕はハナに笑い返した。……完全に照れ笑いだけだ。

「感謝するのはこっちだよ。ハナのおかげでユフィは助かったんだから」

「いいえ。感謝するのは私の方です。すべてはアリマが私を信じてくれたから」

「いいや、感謝するのは僕の方だ」

「いいえ私が」

「いいや僕が」

「……いい加減にしてくれないか?」

僕とハナが感謝を押しつけあっていると、どこから現れたのかユフィが僕たちの間に割って入ってきた。

ユフィは袖のない無地のシャツにゆったりしたズボンという軽装で、不機嫌そうに腕を組み、僕ら二人を睨みつけている。なんだろう、じとーっとした目つきがとても威圧的だ。温泉の力ほたいしたもので、ユフィの顔はもちろん体のどこにもやけどの痕は残っていない。強く美しい姉は、輝く美貌を保ったまま完全復活を遂げていた。

「ハナ」

「は、はい!」

ユフィが威圧感あふれる声でハナを呼ぶ。人見知りなハナは、高圧的な態度で呼び捨て

にされてカチンコチンに硬直していた。

ユフィのやけどが治った後、二人は何度か顔を合わせている。そのときはとても友好的なムードだったのに、今日のユフィはどうしてこんなに不機嫌なのだろう?

「ハナに言っておきたいことがある」

「は、はい。何でしょうか?」

「ハナのおかげで私は命を救われた。ハナには感謝してもしきれないほどだ」

「そんな、私は別に……」

「だがしかし!」

ユフィはカッと目を見開くと、いきなり僕に抱きつき、僕の頭を自分の豊満な胸に押しつけた。柔らかい谷間に顔を埋めた僕は、窒息しかけてじたばたもがく。

「アリマといちゃいちゃするな! アリマは私のものだ! 貴様にアリマは渡さない!」

「ふざけるなコラ!」

谷間から脱出した僕が、ユフィの腕を振り払う。僕に全力で拒絶されたユフィは、

「アリマ……照れなくてもいいのだぞ」

「照れてない!」

「むちゅー」

「口をタコにして顔を近づけるな!」

強引にキスを迫るブラコン変態姉の頭を押し返しながら、僕は釈明しようとハナを探す。すぐ側で、青ざめた顔のハナが先ほどとは違う意味で涙目になっていた。

「血の繋がった姉弟なのに、そんな関係だったなんて……」

「なんで真に受けちゃった!？」

「思い知ったか泥棒猫め！ 私とアリマの間に余人が入り込む隙間すきまなどないのだ。私たちはただだれた関係なのだ！」

「ただれてないよ！ ハナも真に受けなくて！」

「ごめんなさい！」

「あっ！ ちょっと逃げないで！」

泣きながら研究所に駆け込むハナ。隙あらば僕に抱きつこうとするユフィ。変態な姉を押しつけ、研究一筋に生きてきた世間知らずな温泉学者を追いかける僕。

この日、優秀な温泉学者を研究所に迎え入れたユ国は、温泉国家としての栄えある第一歩を踏み出した。

……先行き不安な幕開けだ。







最後まで立ち読みしてくれて  
どうもありがとう！  
続きは本で楽しんでね！